

機関番号：14701

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820033

研究課題名（和文） 社会的視点から見た日本語方言形成についての研究

研究課題名（英文） Study on Japanese Dialect Formation from a Social Perspectives

研究代表者

澤村 美幸 (SAWAMURA MIYUKI)

和歌山大学・教育学部・講師

研究者番号：80614859

研究成果の概要（和文）：

本研究では、地域社会の持つ社会的性質、すなわち社会的地域性が生み出す言語的発想法と運用意識を明らかにし、それが言語表現や言語行動といった現象面にどのように反映しているかを究明することで、日本語方言の形成を言語外的側面から明らかにすることを目的としたものである。研究期間で取り組んだのは、言語表現の分野の中でも、言語的発想法を反映していると考えられる感動詞の全国調査の結果を電子的にデータベース化する作業が中心である。このデータベース化により、感動詞の全国分布が明らかとなり、それにより、社会的地域性を示す隣接科学のデータとの総合が可能となった。また、同時に過去に収集された和歌山方言を総合し、電子的にデータベース化する作業もすすみ、マクロとミクロの両面から、社会的地域性と方言形成の関係を解明するための準備が整った。

研究成果の概要（英文）：

In this study, in which aims to examine operational awareness and verbal thinking, i.e. social locality, with local community creating clear and how it reflects the linguistic or verbal behavior terms, reveals that the formation of the dialect of Japan from external aspects of language. Database of interjection is considered and in the field of linguistic expression has worked on a research period reflects linguistic thinking national survey results electronically to the core of this study. Database of was it possible and adjacent Sciences and national distribution of the interjection, it shows the social locality of data General. In addition, to clarify the relationship between dialect formation and social area from macro and micro aspects integrated Wakayama dialect previously collected at the same time, an electronic database of work also featured ready.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言、方言形成論、社会的視点

1. 研究開始当初の背景

従来、方言形成論についての議論は、言語内的側面と言語外的側面という2つの側面を峻別して行われることが多かった。しかし、澤村美幸（2011）『日本語方言形成論の視点』（岩波書店）において感動詞を対象に述べたように、一見言語内的要因のみで方言形成を説明できると思われる事例でも、実は地域の社会的な性格が積極的に関与している、という見通しを得ることができた。すなわち、言語外的要因の内実は予想以上に多様であり、その解明のために、今後は社会的地域性と方言形成の関係に集中して研究をすすめていく必要性を認識した。

また、これまでは社会構造という、地域社会の「ハード」の面に注目し、それが名称に反映された親族語彙・民俗儀礼語彙など、一部の言葉が研究対象とされてきた。しかし、方言と地域社会の関係を考える場合、社会構造が生み出す言語環境や行動規範が、言語の発想法や運用意識にどうつながるのかといった、「ソフト」の面にも積極的に取り組んでいく重要性を感じた。こういった問題を解明していくためには、言語表現や言語行動など、地域独自の言語的発想法・運用意識を介在させやすい分野についても、新たに研究対象としていく必要がある。

さらに、最新の研究では、方言学のみならず、日本語学研究全体が、言語を社会・文化や人間関係といった大きな枠組みの中で捉えようという関心が高まりつつある。こうした研究動向をふまえ、方言形成と地域社会の関係についての研究を、より積極的に深化させていく必要があると思いついたことが、本研究の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、社会的地域性が生み出す言語的

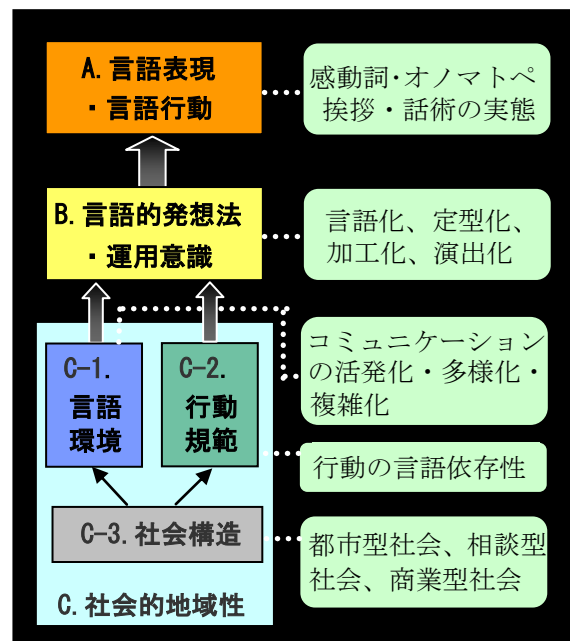
発想法・運用意識を明らかにし、それが言語表現や言語行動といった現象面にどう反映しているかを究明することで、日本語方言の形成を言語外的側面から解明することを目的としたものである。

そのため、地域の社会的性質と言語表現・言語行動との間に働く影響関係について仮説を提示し、各地方言の調査による言語データと民俗学など隣接科学の知見を総合することで、その仮説を検証していく。最終的に、社会的地域性を視野に入れた日本語方言の形成モデルの構築を目指すこととした。

3. 研究の方法

本研究は、社会的な視点を導入した先駆的な方言形成論の基礎を構築するための試みである。そのため、モデル化のための枠組みや見通しを得ることに主眼を置く。したがって、一定の仮説を用意し、それを検証するかたちで研究を展開していくこととする。提示する仮説の枠組みは次の図のとおりである。

本研究における仮説の枠組み



(ア) 言語的発想法・運用意識の地域差：「A.

言語表現・言語行動」の現象面の観察からは、「B. 言語的発想法・運用意識」に関して少なくとも**言語化**（ものごとを言葉で表現するか否か）、**定型化**（表現に定型性が強いかわるか）、**加工化**（間接的・婉曲的な表現を行うかどうか）、**演出化**（話術により会話の進行を操作するか否か）という4点で地域差の現れることが予想される。

(イ) 言語的発想法・運用意識と社会的地域性の関係：「B. 言語的発想法・運用意識」における言語化・定型化・加工化・演出化の傾向は、「C. 社会的地域性」から影響を受ける。すなわち、**C-3. 社会構造**（都市化の状況や社会形態、産業構造）を背景とした**C-1. 言語環境**（コミュニケーションの頻度・多様性）と、**C-2. 行動規範**（言語への依存性）とが、言語的発想法や運用意識を形成する。

(ウ) 日本語方言における地域差、および方言形成論の再構築：上記(ア)(イ)を日本語方言にあてはめた場合、次のような地域差が描ける。すなわち、**マクロな地域差**として、西日本（特に近畿）対東日本（特に東北）の違い、**ミクロな地域差**として、都市部と農村部の違いが存在し、現実の地域差は両者の複合によって説明される。社会性に根ざした以上のようなマクロ・ミクロの複合的地域差の成立を説明するために、「伝播論」を主体とした従来の方言形成論に「自律的变化論」の考えを合わせた新たなモデルの構築を行う必要がある。

以上の目的のために、具体的には次のような課題に取り組む。

(1) 言語表現・言語行動の地域差の把握：

すでに得られている調査データを利用するほか、新たな全国調査と主要地点調査を企画し、言語表現・言語行動の実態の把握を行う。

(2) 言語的発想法・運用意識の地域差の把握：

言語化、定型化、加工化、演出化に関して、上記(1)の調査から帰納するとともに、話者の意識・態度を明らかにするための調査を行う。

(3) 社会的地域性の把握：「社会構造」に関しては、隣接科学の研究成果を利用して整理する。「行動規範」「言語環境」についても同様だが、簡易な調査で既存のデータの不足部分を補う。

(4) 社会的地域性と言語的発想法・運用意識との関連の把握：(2)(3)を総合的に検討することで、社会的地域性と言語的発想法・運用意識との関係や、それが言語表現・言語行動へどう反映するかを、上記の仮説に沿って明らかにする。

(5) 社会的地域性の立場からの方言形成モデルの構築：以上の(1)～(4)の作業を通じて、社会的地域性を視野に入れた日本語方言の形成モデルを構築する。

4. 研究成果

今回は、上記3「**(1) 言語的発想法の地域差の把握**」で挙げた、言語的発想法を反映させやすいと考えられる言語分野の中でも、とりわけ学界でも未開拓の分野である感動詞を対象とした研究を行った。

具体的には、既に全国の市町村を対象に実施した通信調査の結果を整理し、電子的に取り扱うことを可能とするデータベース化の作業を実施した。

このデータベース化により、これまでは研究されてこなかった感動詞の全国分布やその特徴が明らかになりつつある。この研究成果については、一部ではあるが、学会発表①に記した日本語学会シンポジウム「方言形成論の展開」で、「暑い」「熱い」「辛い」「汚い」といった場面で何と声を上げるか、という感嘆表現の方言形成と、その特徴が何を意味す

るのかについての解釈を発表した。

また、今回は各データベースを完成させるための作業に最も力点を置いたため、社会的地域性を示す隣接科学分野のデータとの総合に着手することはできなかったが、感動詞の全国調査結果をデータベース化したことにより、その分布図を作成することが格段に容易になったため、隣接科学のデータと比較対照するための準備段階としては十分な成果が得られたと言える。

また、全国を対象としたマクロな研究だけでなく、さらに狭い地域でのミクロのレベルで社会的地域性と方言形成の関係を明らかにすることも、論の実証性を高めるために必要であるため、今回は和歌山県方言を対象とし、方言データの収集を実施した。

具体的には、過去の和歌山県方言に関する文献から和歌山の方言データを収集し、それらを電子的にデータベース化することにより、方言分布図を作成し、社会的地域性といった言語外のデータとの対照を企図して作業を行った。作業は感動詞のデータベース化と並行して行ったため、結果的に、年度内には和歌山県方言のデータベース化をすべて終えることはできなかったが、今後もこの作業を継続して行うことで、よりミクロとマクロという両面からの方言形成の特徴を総合的に検討することが可能になる。

以上の結果を総合し、今後は社会的地域性の影響により、方言形成にどのような特徴が現れるのかを引き続き検討していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 澤村美幸、全国方言調査データから見た感動詞の地域差、大規模方言データの多角的分析 成果報告書一言語地図と方言談話資料一、査読無、巻号無、2013、

pp. 81-91

- ② 小林隆、澤村美幸、驚きの感動詞「バ」、宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究、査読無、巻号無、2012、pp. 165-188
- ③ 澤村美幸、方言研究の新たな展開—知られざる地域差の発掘—、日本語学、査読無、30-14 巻、2011、pp. 276-285

[学会発表] (計1件)

- ① 澤村美幸、感嘆表現の地域差と方言形成(「方言形成論の展開」シンポジウムパネリスト)、日本語学会、2012年11月3日、富山大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澤村 美幸 (SAWAMURA MIYUKI)
和歌山大学・教育学部・講師
研究者番号：80614859

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：